

雜載

チ檐端ニ架之テ雨滴ヲ受ル具也。俗ニトニダケ、或ハトセダケトモ云。竿賣槌竹賣トモニ肩ニシテ巡ル。

〔常陸國風土記〕行方郡○中 東山有社、榎樹、椿、椎竹、箭麥門冬、往往多生。

略

〔竹取物語〕今はむかし竹とりの翁といふものありけり、野山にまじりて竹をとりつゝ、萬の事につかひけり、名をばさぬきの宮つことなむいひける。其竹の中に本光る竹なむ一すぢ有けり。あやしがりて寄て見るにつゝ、の中ひかりたり、それを見れば、三寸ばかりなる人いとうつくしてゐたり、翁云やう我朝毎夕毎にみる竹の中におはするにて、亥りぬ子になりたまふべき人なめりとて、手に打えて家にもちて來ぬ、めの女にあづけてやしなはす、うつくしき事限なし、いとおさなければ、こに入てやしなふ竹とりの竹をとるに、此子を見つけて後に、竹とるにふしを隔て、よごとにこがねある竹を見つくる事、かさなりぬ、かくてをきなやうくゆたかになり行。

〔翁草四十八〕元祿年中駿府の寺に、一夜の内に、庭に假山の如く、地形凸に成る怪見るに一兩日過れば、笋生たり、近隣に藪無きに希有の事也と沙汰する内に、追日笋成長し大竹と成、日通り凡三尺廻有、前代未聞の事と、諸人群集して是を見る。其後往來の御番衆某是を聞及て、彼寺に立寄見物して、住僧に所望す、住持も此竹故に寺内に人の群るを厭て、幸に伐して彼士に與ふ、彼士是を携歸人々に配分して、思ひくの器物とす丸益烟管益、或は樽杯に製して珍器とす、或人飯器にして、翫しを見たりと語れる人有、其大きさわたり八九寸有しとぞ。

〔東遊記〕竹根化蟬。

越前府中の南二里に、粟田部といふ所あり、○中此所に粟生寺といふ寺あり、天台宗にて坂本西教寺の末寺にて、頗る大寺也、此寺の住持は余○南溪橋が方外の親友ゆゑ北遊の時も廿日計逗留せり、其前年の事なりし由、此寺の北面にある藪を堀開く事ありしに、竹の根ことぐに蟬に變化